幼児の生活行動の発達と性差 —性役割の形成に注目して—

出口 貴嗣, 柴田 知己, 佐藤 陽彦
九州芸術工科大学人間工学教室

Development of Behavior and Sex Differences in Infants; With Reference to the Formation of Sex Role

Takatsugu DEGUCHI, Tomoki SHIBATA and Haruhiko SATO
Department of Ergonomics, Kyushu Institute of Design

In order to observe the formation of sex role, an investigation was made on the development of behavior and sex differences in infants aged 1 to 6 at Fukuoka-city. The present study consisted of questionnaire on behavior of daily living and breeding, block construction test and coloring a drawing test. The parents instructed their infants to become masculine for males and feminine for females on the basis of traditional view. No sex differences were observed in construction ability of infants aged 4. Favorite colors were different according to sex.

(Ann. Physiol. Anthropol. 10(3): 171-182, 1991)

Key words: Infant, Sex difference, Questionnaire, Block construction test, Coloring a drawing test

国連は1975年を国際婦人年 (IWY, International Women's Year) とすることを決定し, 76年から85年までの10年間を「国際婦人の10年」とした. これを契機に世界人口の半ばを占める女性の潜在力を十分活用し, 男女平等およびあらゆる分野への参加を目標とした活動がくり広げられた. このように, 現在「女性差別」に関する問題は, 人種差別と同様世界的に議論されている.

日本は世界的にみても性役割意識が根強く残っている国であり, これは図1に示した, 「婦人問題に関する国際比較調査結果の概要 (1983年3月)」によると, 日本の婦人 (1294人, 平均年齢39.4歳) は他の国と比べて, 特に性役割意識の教育に対する関心が非常に強いことがわかる. また, 小学社会科教科書の挿し絵を分析した結果 (日本子どもを守る会, 1982) によると, 小学一年社会科教科書の挿し絵の中の女の子はきまり

図1 「あなたは子供のしつけ方について, 男の子は男の子らしく, 女の子は女の子らしく, しつけた方がよいと思いますか. それとも同じようにしつけた方がよいと思いますか」という質問に対する回答の国際比較 (日本子どもを守る会, 1983)

を守り、静的で力のいらないゴム跳びや読書といった遊びをしている姿が描かれている。一方男の子ではきまりを守らずに、人に迷惑をかけながらボール遊びやジャングルジムなどといった動的な遊びをしている姿が描かれている。こういった部分でも日本における女性問題の根の深さが理解できる。

従来から日本では「男は仕事、女は家庭」という固定化された性役割の分業意識が根づいており、このような分業は子供を多く生み育てるという目的には効率的であった。しかし、近年になってDINKS (Double Income No Kids) とよばれる、男女それぞれが仕事を持ち、意識的に子供を作らないスタイルや、独身として生きることによって積極的な価値を見だし、経済的にも精神的にも自立して生活している人が増加してきており、こういった性役割意識も変化してきている。

ところで、この「性役割」を決定する要因としては、大きく「遺伝的要因」と「環境的要因」の2つに分けられると考えられている。そしてヒトの脳に性差が生じる過程として次の2つがある。その一つは先天的な部分で、これは前出の遺伝的要因に相当する。そしてもう一つは後天的な部分でこれは環境的要因に相当し、この分化は幼時期までに形成されてその後は一生不変である。

そこで文化的分化の最も重要な段階を迎えている幼児を対象にして、行動及び思考(精神活動)の発達とその性差という観点から、その実体を観察することを目的とした調査を行った。

方 法

本研究は、生活行動の発達段階及び幼児の性差を検討することを目的として、幼児の家庭での生活状況を判断するための「アンケート調査」、空間構成能力を判断するための積み木を用いて模様づくりをする「積み木調査」、色の好みを判断するための「塗り絵調査」の3つの調査から成り立っていた。

調査対象の幼児は、福岡市内の商業地域に立地している6年保育の保育園の園児であった。保護者の職業に関しては、プライバシーの侵害につながるおそれがあったため調査を行わなかった。各クラスの人数を表1に示す。ここで5歳児とは、4月の時点で5歳でありその学年度で6歳になる幼児を指している。調査時期は1989年12月から1990年3月までであった。アン

表1 各クラスの構成人数

	男 児	女 児	合 計
0 歳 児	5人	10人	15人
1 歳 児	11人	11人	22人
2 歳 児	16人	10人	26人
3 歳 児	21人	12人	33人
4 歳 児	26人	20人	46人
5 歳 児	28人	17人	45人
総 計	107人	80人	187人

ケート調査は全クラスで実施したが、積み木調査は3歳児で、塗り絵は、3、4、5歳児で行った。また、3、4、5歳児で身長、体重を測定した。

各調査を行う前に、調査者は十分に園児と一緒に遊んだり食事を取ったりして、調査者がその場にいても違和感がないよう配慮した。また各クラスの保育士と十分に協議を重ねて各調査の内容を検討し決定した。2歳児以下はアンケート調査しかできなかったため、今回の資料は特に3歳児以上を中心にまとめてみた。

(a) アンケート調査

幼児がどのようなことをして遊んでいるのか、どのような生活動作ができるのか、どのようなしつけをされているのかを判断するために、アンケートの内容は大きく分けて「遊びについて」「生活動作について」「しつけについて」の質問項目に分けられた。

遊びについては、「何をして遊んでいるか」「どこで遊んでいるか」「誰と遊んでいるか」「テレビは何を見ているか」「けんかをしているか」の項目に分かれていた。

生活動作については、「靴下をはくことができるか」「靴の左右を間違わないか」「お風呂で身体を洗うことができるか」「歯を磨くことができるか」「何を使って食事をしているか」「ひもをかた結びにできるか」「ひもをちょう結びにできるか」「洋服の前ボタンをかけることができるか」であった。

しつけについては、「お手伝いをさせているか」「おけいごに通っているか」「寝る時間はいつか」「箸やえんぴつを右手で持つようにしつけたか」「箸を正しく持つようにしつけたか」「見せたくないテレビ番組はあるか」「寝かせつけるときに本を読んでいるか」「両親が子供と接する時間はどれくらいか」「男らしく女ら

しくしなさいと言っているか」であった。

アンケートには遊び、生活動作、しつけというような区分けはしていなかった。また、おけいこごとなどは年齢により内容を変えていた。各質問項目は選択肢からなっており、該当する答えの番号に○をつけるという形式をとった。アンケートは、保母へ委託して、直接保護者に手渡ししてもらい、その際に研究の主旨の説明も加えてもらった。回収には配付日から一週間後までに保母に手渡ししてもらうようお願いした。今回の調査におけるアンケートの回収率は73.8%であった。

(b) 積み木調査

今回の調査では、ソ連の教育心理学者、ニキーチン(1981)の考案した、図2に示すように4色に塗り分けられた積み木を4個使用した。

図2 ニキーチンの積み木

例題1
大四角

例題2
小四角

問題1
棒

問題2
家

問題3
稲妻

問題4
ななめ

問題5
風車

問題6
坂

問題7
幾何学

図3 積み木調査の問題

調査者は最初被験児をこの積み木に慣れさせ、この「模様作り」のルールを理解させるために、図3に示す例題1、例題2の2つのパターンを、4つの積み木の赤い部分を使って作り被験児の前方に提示するとともに、同じ模様を作るよう教示した。被験児はこれを参考に、自分が手にしている4つの積み木を組み合わせることにより、積み木の性質や問題の主旨を理解した。もし、被験児が十分に考えてもわからない場合、調査者は、必ず被験児が自分一人ですることができるようにまでしていぬに指導した。

実際の調査で使用した問題は、図3に示した7つのパターンを問題1から問題7まで順に提示し、提示の方法は例題と同じであった。問題は、子供に説明しやすいように問題1から順に「棒」「家」「稲妻」「ななめ」「風車」「坂」「幾何学」という名前をつけた。またストップ・ウォッチを使用して模様作りにかかる時間を測定し、3分以内にできない場合は「できなかった」とみなして、被験児の模様づくりを手伝いその解答を教えた。

調査は、被験児が毎日使う教室から少し離れたところにあるピアノ室を使って行った。ここは普段あまり人が出入りすることがないためとても静かであり、被験児も調査に集中できるからである。そして、問題を提示するときには被験児と調査者が一つの机を中心に対面して座り、「積み木で遊ぶ」という雰囲気で行うように心掛けた。被験児の中には、萎縮して調査を行えなかった者も、調査に集中できなかった者もいなかった。今回、調査の対象になったのは、3歳児のクラスの中の男児20人、女児11人の合計31人である。

(c) 塗り絵調査

塗り絵調査で使用した下絵は、図4に示したもので大きさはA4(297×210mm)サイズであった。子供たちは、保育園のカリキュラムの時間内に、使い慣れている各自所有の16色のクレパスを使い、絵の中の男の子、女の子、傘を自分の好きな色で着色し、先生に提出した。分析では男の子の絵を10ヶ所、女の子の絵を11ヶ所、傘を2ヶ所に分けてそれぞれの部分にどんな色が塗られているかを絵から読み取り分析した。塗り絵調査の対象となった園児は、3歳男児17人、女児7人、4歳男児20人、女児16人、5歳男児28人、女児16人であった。

図4 塗り絵の下絵

結果および考察

3, 4, 5 歳児の平均身長および体重を図5に示す。身長、体重とも年齢とともに増加している。男女差については3 歳児の身長、体重で女兒の方が多少低い(小さい)ようであり、5 歳児の体重で女兒の方が大きいようであるが統計的有意差 ($p < 0.05$) は認められなかった。それぞれの調査の結果および考察を以下に述べる。

(a) アンケート調査について

(1) 遊びに関する項目

どのような遊びをしているかについて発達段階と性差を端的に見るために1～5 歳児について、質問の回答選択肢の22個についての結果を図6に示す。明らかに性差が見られるのは「ままごと遊び」と「人形遊び」であり、これらは女兒の遊びである。また「ごっこ遊び」も女兒の方が多いが、内容が男児とは異なっており、女兒は「お母さんごっこ(ままごととほとんど同じ)」や「お店屋さんごっこ(ままごとの変形)」を好んでおり、男児は「ヒーローごっこ(テレビのヒーローの真似をして遊ぶ、例えばマスクマンやウルトラマンなど)」を好んでいる。「歌をうたう」も各年齢とも女兒の方が多く遊んでいる。男児は「カード遊び(お菓

図5 3, 4, 5 歳児の男女別平均身長、体重

子のおまけのカードを見せあって遊ぶ)」や「ブロック遊び」を好んでいるようである。「カード遊び」は年齢と共に増加して、「ブロック遊び」は年齢と共に減少している傾向があった。年齢による変化として、「鉄棒遊び」や「自転車遊び」は年齢と共に増加しており、身体調整能力の発達との関係が大きいと考えられる。「三輪車遊び」は2 歳児で最も多く、それ以上になるとだんだんと減っていき、5 歳児では全くみられない。「積み木遊び」も年齢と共に減少していくが、女兒の方が早く遊ばなくなっている。「本を読んでもらう」も年齢と共に減っていき、年齢が高くなると読んでもらうよりも自分で読んでいるのではないかと考えられる。

遊び相手については兄弟(姉妹)がいる場合は、兄弟(姉妹)と遊んでおり、いない場合は、父母などと遊んでいるようである。また年齢が高くなると近所の友達や保育園の友達と遊ぶ割合も増加する傾向が見られた。

兄弟、姉妹がいることにより遊びの内容が異なっていると考えられるために図7に4 歳児と5 歳児をまとめて、兄がいる場合、姉がいる場合、弟または妹がい

図6 「どのような遊びをしていますか」に関する結果

る場合とに分けて示す。上にも下にも兄弟（姉妹）がいる場合には兄弟を優先してそちらの方で分けた。兄も姉もいる場合や兄弟（姉妹）がいない場合は回答数が少ないために省略した。

女児の遊びである「ままごと遊び」は、姉がいる場

合男児でも遊んでいるのに対して、兄がいる場合は1人も遊んでいない。しかし「人形遊び」は姉がいる場合でも男児は遊んでおらず、これは「ままごと遊び」は1人ではできないのに対して「人形遊び」は1人でもできるからではないかと考えられる。また兄がいる

図7 「どのような遊びをしますか」に関する兄弟の違いによる結果

場合「ごっこ遊び」は少ない。

けんかは兄弟（姉妹）がいる場合はけんかをよくしており、当然のことながら兄弟（姉妹）がいない場合は相手がいないためにけんかをあまりしていない。しかし年齢が増すと兄弟（姉妹）がいない場合でも保育所や近所の友達とけんかをする回数が増加している。

(2) 生活動作に関する項目

図8に「靴の左右を間違わずにはくことができますか」という項目、図9に「かた結びができますか」という項目の結果を年齢別に示す。これらの項目では発達段階が明らかに見られ、年齢と共に左右方向の判断や手指の巧緻性が発達していることがうかがわれる。

図8 「靴の左右を間違いませんか」に関する結果

図9 「かた結びができますか」に関する結果

「ちょう結びができますか」という項目では、5歳児の男児ではうまく結ぶことができると答えたものは1人もいないのに対して、約4割の女児がうまく結ぶことができると答えており、これらが手指動作の巧緻性を表すとするならば、女児の方が発達が早いようである。しかしながらこれはしつても関係があり、単純に女児が手指機能の発達が早いと結論するわけにはいかない。同様に「歯を一人で磨くことができますか」についてや「お風呂で自分の身体を洗っていますか」についても、年齢が上がるにつれ上手にできるという割合の者が増加している。

(3) しつけに関する項目

「お手伝い」に関しては「毎日手伝う」という解答が5歳男児で16%、女児で31%であった。そして、その内容としては、男女とも「食事の準備」が最も多く、5歳児の男児の58%、女児の92%が手伝っていた。

「おけいこごと」については、女児の方が男児よりも早くからおけいこごとに通っていることがわかった。4、5歳の女児の約8割は、なんらかのおけいこごとに通っている。内容は、「水泳」と「ピアノまたはオルガン」がほとんどであり、そのほかに「英語」や「絵画」を習っていると答えたものがいたが、全体的にみると少数派であった。しかし、英語を6人の幼児が習っているという事実は注目すべきことである。

「箸を正しく持つようにしつけましたか」という項目についての結果を図10に示す。調査した保育園は0歳児から給食を箸で食べるように指導しており、早い時期から箸を正しく持つようにしつけている。年齢による一定の傾向及び性差は見られない。「えんぴつを右

図10 「箸を正しく持つようにしつけましたか」に関する結果

図11 「男らしく女らしくしなさいと言いますか」に関する結果

手で持つようにしつけましたか」という項目については、どちらかと言えば女児の方がよりしつけられているが、箸と同様に一定の傾向は認められなかった。

「男らしく女らしくしなさいと言いますか」についての結果を年齢別にして図11に示す。女児よりも男児の方がより男(女)らしくしなさいと言われており、男児は年齢が増すと共によく言われるようになっている。幼児がこのように「男(女)らしくしなさい」と言われることは、性役割の形成に重要な影響を及ぼしていると考えられる。

(b) 積み木調査について

(1) 性差からみた空間構成能力

各課題の達成率を男女別に示したのが図12である。この結果からは、「風車」以外ははっきりした性差はみられなかった。また、各課題の成績と月齢との関係进行分析してみると、特に「ななめ」「坂」「幾何学」といった課題で、月齢が高いほど達成率が大きいという結果となった。

図12 積み木調査における達成率

(2) 達成率の高い園児と低い園児の違いについて

次に対象となった被験児を、7つの問題のうち6問以上できたグループ、5問できたグループ、3～4問できたグループ、2問以下しかできなかったグループという4つのグループに分け、それぞれA群(5人)、B群(10人)、C群(7人)、D群(9人)とした。そして、各課題についてそれらの群別に達成率を分析したのが図13である。この図から、A群、B群は「稲妻」「風車」「坂」「幾何学」といったどちらかといえば難しく、達成者の少なかった課題でも達成率は若干の低下をみせるだけであるが、C群、D群では達成率がほぼ0%近くまで低下していることがわかる。

図13 積み木調査における正解率により分類されたグループ別の達成率

このようなことから達成率にあまり大きな差のない「棒」「家」「ななめ」といった模様と、差の大きな「風車」「幾何学」といった模様の間には、それを作る際の思考プロセスにおいて大きな違いがあるのではないかと考えられる。「棒」「家」といった課題は全体的・総合的に考え、自分の積み木を何度か入れ替えるうちにできる可能性が高いが、「稲妻」「風車」「幾何学」といった図形は、どの積み木がどの方向を向いていて、それぞれがどのような関係になっているかを把握しなければ作り上げることはできないように思われる。

そこで、次にこれらの課題が5問以上できたグループ(A群およびB群)と、4問以下しかできなかったグループ(C群およびD群)の2つに分け、アンケート調査の結果と併せて生活状況の分析を試みた。

図14は、A、B群とC、D群の園児たちが毎日遊んでいる遊びの種類について示したものである。この図の中で特徴的だったのは、A、B群では「ブロック遊び」や「ファミコンなどのテレビゲーム」で遊んでいる子供が多く、C、D群では「砂場遊び」や「ごっこ遊び」「自転車」「水遊び」で遊んでいる子供たちが多かったことである。特に、「ブロック遊び」などは今回行った積み木による模様作りと似ている部分が多く、毎日このような遊びで遊んでいることの効果が、積み木による模様作りの結果に現われたのではないかと推察される。

またアンケートの生活動作に関する項目で、A、B群とC、D群の間に顕著な差があったのは、「靴下の左右を間違わずにはくことができますか」「かた結びができますか」「靴の左右を間違えないではけますか」の3項目である。この3つについてはC、D群の園児よりも

図14 積み木調査における正解率により分類されたグループ別の遊びの違い

A, B群の園児の方が早い時期にそれぞれの行動を身につけているようである。他の項目については、A, B群の園児とC, D群の園児の間に大きな差はなかったか、わずかにA, B群の子供たちの方がそういった生活動作を身につけるのが早かったという結果となっており、C, D群の園児の方が早かったといった結果の項目はなかった。

次にしつけに関する項目であるが、「どのようなお手伝いをさせていますか」という項目に関しては2つの群で顕著な差はなく、どちらの群も「食事の準備」「新聞取り」「兄弟の世話」といったことをさせている家庭が多い。またおけいこごとに関する項目については、3歳という年齢のためか、まだおけいこごとをさせている家庭が少なく、A, B群の中にピアノを習っている園児が2人いたのと、C, D群の中に水泳を習っている園児が1人いただけであった。

また、「見せたくないテレビ番組がありますか」という項目は、C, D群の園児に比べてA, B群の園児の両親に、見せたくない番組があるといった解答が多かった。このことから、C, D群の園児にくらべてA, B群の園児の方がよりきびしいしつけをされているのではないかということが推察される。

(c) 塗り絵調査について

(1) 男児の好きな色、女児の好きな色について

子供たちは、この塗り絵の中でも、特に傘や人物の着ているシャツ、ズボン、スカートといったものに自

分の好きな色を塗るのではないかと考えられる。そこでまず各クラスの男児、女児が、男の子の着ているズボンにどんな色を塗ったか、女の子のはいているスカートにどんな色を塗ったかについて分析を試みた。その結果を帯グラフにしたのが図15である。

これによると、男児は男の子の着ているズボンに対して青、水色、緑、黄といった色をよく使っており、

図15 男の子の絵のズボンに塗った色(上)と女の子の絵のスカートに塗った色(下)

女兒は女の子のはいているスカートに対して赤、ピンク、オレンジといった色をよく使っていることがわかる。これらの色は、それぞれ「男児が好んで使う色」および、「女兒が好んで使う色」であると考えられる。

また、この図から男児が女の子のはいているスカートを塗る場合、3歳児および4歳児では「男児が好んで使う色」である青、水色、緑、黄を使っている男児が多いけれども5歳児では80%以上の男児が赤、ピンク、オレンジといった「女兒が好んで使う色」を使っていることがわかる。こういった傾向は女兒が男の子の着ているズボンを塗る場合にもあてはまる。

(2) 塗り方の発達について

塗り方の発達をみるため、頭、顔、シャツ、ズボンの4ヶ所に注目して、3、4、5歳児の園児たちが、それぞれ最大何色の色で各部分を塗っているのかを分析した。図16(上)に示すのは、男児が男の子の絵の頭、顔、シャツ、ズボンを何色の色で塗ったかについてであり図16(下)に示すのは、女兒が女の子の絵の頭、顔、シャツ、スカートに何色の色で塗ったかである。例えば、図16(上)の「5歳男児」の頭の項目をみると2色という結果が読み取れるが、これは5歳男児が男の子の頭を2色で塗っているという結果であり、もともなったデータをみると、この5歳男児は男の子の頭を黒かこげ茶で塗っていた。

図16 男児が男の子の絵に塗った色数(上)と女兒が女の子の絵に塗った色数(下)

この2つのグラフからは、頭、顔といった部分は年齢が高くなるにつれて使用色数が少なくなる傾向にあり、シャツ、ズボン、スカートといった部分は、年齢にかかわらず多くの色を使っているといった結果が出ている。このようなことから、年齢とともに頭、顔といった部分は色のイメージが固定化し、ほとんどの園児が同じ色を塗るのに対し、シャツ、ズボン、スカートといった部分はその部分の色に対する固定的なイメージがないため、年齢にかかわらず、それぞれの園児が好きな色を使って塗っているのではないかと思われる。また、頭と顔の使用色数が男女間でほとんど変わらないのに対してシャツ、ズボン、スカートに関しては女兒よりも男児の方が多くの色を使っていることも注目される。

(3) 傘の塗り方について

傘の部分塗るのに、それぞれの色を何人の人が使ったかといったことに注目すると、年齢が低いと使っている色の数が少ないこと、青、水色、緑、黄といった「男児が好んで使う色」を使っているのはやはり男の子が多く、オレンジ、赤、ピンクといった「女兒が好んで使う色」を使っているのは女兒が多いといったことがわかった。

そして、5歳児ではさすがに多くの色を使っていて、男児が「男児の好きな色」ばかりを使っているとか、女兒が「女兒の好きな色」ばかりを使っているといった傾向がなくなるようである。このことから、この程度の年齢になると、多くの種類の色をバリエーション豊かに使うことを覚えるのではないと思われる。また、4歳児は、ほぼ5歳児の場合と3歳児の場合の間であるような結果となった。

また、最後に付け加えておきたいのはピンク色の使用についてである。図15においてもピンクを使う女兒は多かったが、この傘の塗り方に関する結果もこの青とピンク、それも特にピンクの使い方については歴然とした性差があった。

おわりに

「アンケート調査」では、生活行動の発達が年齢および性差に深い関係があることがわかった。遊びに関する項目からは、男女に関わらず年齢変化により遊び割合が増えていく遊びと減っていく遊びがある。また

女兒特有の遊びや男児特有の遊びもあり、例えば「ままごと遊び」「人形遊び」などは女兒特有の遊びであると考えられる。さらに、この年代の遊び方は兄弟（姉妹）の有無によって大きく影響を受けることがわかった。生活動作に関する項目からは「ちょう結び」に関する項目で女兒の方が上達が早いことがわかった。この結果から、この年代で女兒の方が手の巧緻性の発達が早いという可能性も考えられる。しつけに関する項目からは全体的に女兒の方がきびしくしつけられている傾向がみられ、特に4、5歳の女兒の80%が何らかのおけいこごとに通っているという結果は注目すべきことである。しかし、「男らしく、女らしくしなさい」という言葉は女兒よりも男児に対して言う両親が多く、また男児の方は年齢とともにこのようなしつけをする両親の割合が増すのに対して女兒の方は減少するという結果であった。図1に示した資料と今回の結果を比較すると、今回の調査は協力していただいた両親の世代が、図1に示した資料の調査対象と比べて5～10年は若い世代であると考えられる。けれども、今回の結果におけるこういったしつけをする両親の割合がほぼ同じであり、こういった古くからの固定観念が非常に根強いものであることがわかった。そして、こういったしつけが子供のする遊びや生活動作の発達にも大きく関係していると考えられる。

「積み木調査」では、3歳児の段階で空間構成能力にはほとんど性差がみられなかった。またこの段階での模様づくりの能力は月齢による影響が大きいことがわかった。さらに、園児をたくさん課題ができたグループとそれ以外のグループの2つに分けてみると、前者と後者は日常生活における遊びに若干の違いがあり、前者は「ブロック遊び」「テレビゲーム」といった室内での遊びを好むのに対して、後者は「砂場遊び」「自転車」「水遊び」といった屋外での遊びを好む傾向がある。前者は幼児期に身につけるべき生活行動を後者より早く身につけており、そして前者の両親は後者に比べ子供のしつけにきびしい人が多いのではないかと考えられる。

「塗り絵調査」では、青、水色、緑、黄が「男児が好んで使う色」であり、赤、ピンク、オレンジが「女兒が好んで使う色」であることがわかった。また、3、

4歳児に比べ5歳児になるとほとんどの男児は女の子のスカートに対して「女兒が好んで使う色」を塗り、ほとんどの女兒は男の子のシャツに対して「男児が好んで使う色」を塗ることがわかった。このことから、3歳という年齢までに子供たちは自分がどちらの性であるかを認識し、5歳になると性の違いを意識するのではないかと考えられる。また、3歳児と5歳児を比べると5歳児の方が色を塗る時、頭、顔といった部分に関しては各部分に対する色のイメージが固定化している傾向があった。園児たちの絵を実際に見ていると、特に5歳児が本当にカラフルに傘の色を塗っているのに驚かされる。このことについては保育園での絵画教育も影響しているのではないかと思われる。

子供達が育っていく過程が男女間で異なっていることは、図11に示した「男らしく女らしくしなさいと言いますか」というアンケート調査の結果にも象徴されている。今回の調査が福岡という地方都市の保育園を対象としたことにも影響されるのではないかと考えられるが、現代の子供たちの両親にも男女の性役割意識が根づいていることは否定できない。そしてこういった両親の性役割意識が、子供たちの成長に大きく影響を及ぼしていると思われる。

今回の調査で、幼児期がヒトの一生の中でも非常に重要な時期であり、このような時期の教育を担っている保母の先生方の苦勞がよく理解でき、感心するばかりであった。最後に、今回お世話になった保育園の先生方、そしてこの保育園に通う子供達とその保護者の皆さんに感謝いたします。

文 献

- 日本子どもを守る会(編), 1982: 子ども白書 1982年版. 草土文化, 351.
 日本子どもを守る会(編), 1983: 子ども白書 1983年版. 草土文化, 351.
 Никитин, Б. П., 1981: РАЗВИВАЮЩИЕ ИГРЫ. Педагогика.
 (匹田軍次訳, 1986: ニキーチンの知育遊び. 暮らしの手帖社)

(1991年3月28日受付)

佐藤 陽彦
Haruhiko SATO

815 福岡市南区塩原4-9-1 九州芸術工科大学人間工学教室
Department of Ergonomics, Kyushu Institute of Design, Shiobaru, Minami-ku,
Fukuoka 815, Japan.